

にしたと言われている。

それでは、屋須弘平はどうして写真館を開設したのだろうか。写真への興味と基本的な撮影技術は、メキシコ金星観測隊が横浜滞在中にメキシコ人写真技師アグスティン・パロスの傍らで学んだ。その基本的な写真技術を生かして首都で写真館を開設したのである。また、グアテマラ人女性マリア・ノリエガと91年に結婚した。その後、彼はグアテマラのアンティグア市に移り住み、再び「日本写真館」を95年に開設している。その町での滞在記録と写真原版を保存している博物館（CIRMA「メソアメリカ地域研究センター」）に、私は2003年2月に訪問した。

現在でも博物館には当時撮影されたガラス製原版八百枚が保存されていて、現物の一部を見せてもらう機会に恵まれた。メキシコ金星観測隊の日本人通詞は、横浜滞在中に学んだ天体観測記録写真技術を生かして、今度は独自にグアテマラ国でスペイン植民地時代からの歴史建造物や、十九世紀の人物と風物を見事に記録に残した。今ではグアテマラにとって、「日本写真館」は歴史の証人となっている。なお、CIRMAについての情報提供者は児嶋英雄氏で、現地で数々の貴重な助言を受けたことをここに記して感謝したい。屋須弘平の撮影した写真は現在、次の図録に収められている。『屋須弘平・ノリエガ編 グアテマラ・アンティグア写真集』ブエノスアイレス 1990年と、『カメラレンズを通したグアテマラ 1870年 - 1997年』CIRMA編 1998年。手元にある写真集に掲載されているセピア色の写真を見ていると、遙か明治時代とグアテマラが重なってくる思いがする。前書には本人が撮影した屋須弘平夫妻の結婚式の写真や、後書にアルフレッド・モードスレイが撮影したマヤ古典期の遺跡、ユネスコ世界遺産に指定されているティカル一号神殿は、現在私たちが現地で見える様子と異なり、遺跡はわずが頂上部分だけが発掘されていて、神殿は未だ大部分

が草木に覆われている1882年当時の写真も収録されている。

屋須弘平は1844年に生まれ、30歳の時に横浜でメキシコ観測隊の通詞になったが、75年から二年間メキシコに住み、77年にグアテマラに渡り83年にはカトリック信者の洗礼を受け「ヘスス」（イエス・キリストの「イエス」のスペイン語読みがヘスス）を受礼名とした。初めて「日本写真館」を開設した前年79年にはグアテマラ国で近代的な住民台帳が作製されている。また、現在でもこの国の代表的な輸出農産物となっているコーヒー栽培も本格的に始まった年である。屋須弘平が日本を出国してから15年ぶりに一時帰国したのは89年で実母の肖像写真を撮ったり、高橋是清が銀山開発にペルーに行く時には、秘書兼通訳として同行して一年間だけ現地に滞在した。90年にペルーから再びグアテマラに戻っている。94年からはアンティグア市に移り住みドイツ人写真家E・ハーブルガーから現像技術の指導を受ける機会があった。73歳で1917年に亡くなるまで留まり、グアテマラ国に定住した最初の日本人となった。

明治七年（1874年）に観測された金星の太陽面経過現象は、1882年にも観測できたが、来年、2004年6月8日と2012年にも地球上で再び観測できる。もちろん、明治七年、科学分野の先進国が必死に追及していた天文学的資料の今日的価値は失われていると思うが、当時、来日したメキシコ、米国、フランスの観測所に文部省技官がしきりに出入りして、三カ国の天文学的技術水準を自国の実情と比較して驚嘆の目で眺めていた姿を思い浮かべることは隔世の感がするし、さらに、通詞、屋須弘平の姿を想像することは、明治時代の日本人の気概が凝縮されているようで、夢の上に夢を重ねるようである。

おおがき きしろう

（教授・スペイン語圏の歴史）